

## 田園と時間

——陶淵明（歸去來兮辭）論——

渡 邊 登 紀

京都大學

陶淵明という人物が「隱逸詩人」「田園詩人」などと稱され、彭澤の令を辭して田園に歸り、その後は二度と仕官することなく、田園生活を営み、その田園を詩文の中に詠ったことは周知の事實であろう。そして、その決意表明として「歸去來兮辭」が詠われたこともあわせて廣く知られている。「隱逸詩人」「田園詩人」としての先入観から陶淵明や「歸去來兮辭」を見てしまいがちであったが、いまい度、文學作品としての「歸去來兮辭」を探ることが本論の試みである。例えば、「歸去來」の語などの所謂「歸去來兮辭」固有の語彙などについては多く追究されてきているものの、「田園」という語についてはあまりに無意識的に

「田園」として、受けとめられてしまっているのではないだろうか。「田園」をはじめとして、押韻を中心とする作品構造、序の役割、表現のうちに見える時間性などに光をあてて読み直す時、「歸去來兮辭」という作品が、技巧の凝らされた緻密な構造を持つこと、文學として新たな挑戦であることが改めて見えてくるのである。

### 一 「歸去來兮辭」以前

「歸去來兮辭」を論ずる前に、「田園」の語、及び「田園」に歸るといふ行爲から容易に連想される後漢・張衡の「歸田賦」を、「歸去來兮辭」の作品背景として觸れておこう。

#### (1) 「田園」の語

陶淵明自身が「田園詩人」と評されることもしばしばで、「田園」は淵明と不可分な關係にある語であることは間違いない。しかし、淵明がいう「田園」とは一體どのようなものであるのだろうか。「田園」という語そのものに即し

て、その用例をさぐるうとするならば、『文選』の中には「田園」という語が、この「歸去來兮辭」を除いては存在しないということが見えてくる。一方、淵明作品においては、「歸去來兮辭」の他にもその用例を見ることが出来る。<sup>①</sup>

孔耽道德 樊須是鄙 董樂琴書 田園不履（孔は道德に耽り 樊須をば是れ鄙しとす 董は琴書を樂しみ 田園をば履まず）（勸農六首、其六、『陶淵明集校箋』、卷一）

農業の教えを請う樊須（樊遲）を孔子が「小人」と稱したこと（論語）子路篇、董仲舒が學問を究める様子は三年の間「園」を見ないほど熱心であったこと（『史記』儒林傳、『漢書』董仲舒傳）、これらの故事がこの四句の典故となっている。いずれも儒者のあるべき姿を示した故事であるが、淵明はこれらの故事を好意的に見てはいない。「樊須」「田園」を農業の象徴として用いて、儒者が農業を輕視することに批判的な姿勢を示している。だが、董仲舒が「田園」に足を踏み入れなかったと、この詩は言うものの、典故となる原文には「田園」という語を見ることは出来ない。『史記』は「舍園」、『漢書』においては「園」と記されて

おり、董仲舒が見向きもしなかったのは田畑ではなく、庭と考えるのが一般的な理解ではないだろうか。この詩の中で「田園」の語を用いているのは、「舍園」や「園」を見向きもせぬほど熱心に學問に勵んだことを淵明が「董樂琴書」と表現していることもあわせて、淵明によってなされた固有の表現であったといえるだろう。

『文選』の中に「田」や「園」を用いた語彙は存在しているが、「田園」の語は「歸去來兮辭」を除いては見られないこと、董仲舒の故事に「田園」という表現を用いること、これらは「田園」の語が淵明以前には全く用いられることがなかったことを示しているのだろうか。しかし、「田園」の語は、『文選』や淵明以前の詩文の中に容易には見つけられぬ語ではあるが、史書においては確かに古くから存在している語である。『史記』には三例見られ、まずその用例を挙げてみよう。

武安由此滋驕、治宅甲諸第。田園極膏腴、而市買郡縣器物相屬於道。（武安はこのことよって驕り高ぶり、邸宅は諸侯らの屋敷の中で最もすぐれており、「田園」は肥沃

を極め、郡縣各地の器物を賣る商人が、彼の屋敷を目指して道に續いていた。〔『史記』卷一〇七、魏其武安侯列傳〕

（灌）夫不喜文學、好任俠。……家累千萬、食客日數

十百人、陂池田園、宗族賓客爲權利、橫於潁川。（灌夫は學問を好まず、任俠を好んだ。……家には千金萬金を積

みあげ、食客は數千人、貯水池や「田園」を所有し、彼の一族・賓客らが權力を掌握し、潁川をほしほしにしました。）

〔『史記』卷一〇七、魏其武安侯列傳〕

……上默然、不許、曰「吾久不聞汲黯之言、今又復妄發矣。」後數月、黯坐小法、會赦免官。於是黯隱於田園。（天子は默然としていたが、「私は長く汲黯の言葉を開

き入れなかったが、今もまた出鱈目なことを言うのか」と言

つて、聞き入れなかった。數カ月後、汲黯は些細なことで法に觸れ、罪は赦されたが官職は免じられた。そこで汲黯は

「田園」に隠れた。〔『史記』卷一二〇、汲黯列傳〕

「田園」の語はそれぞれ、農地、財産、隱遁の場を示す語として用いられ、とりわけ汲黯列傳においては、官職を辭して「田園に隠れる」という一つの生き方が提示されて

田園と時間（渡邊）

いるものの、「田園」そのものの具體的イメージは語られていない。つまり、視點はあくまでも「田園」の外側にあって、「田園」内部にはないのである。淵明とほぼ同時代の東晉の葛洪の文章にも「田園」の語が見られ、ここで「田園」の内側に觸れることが出来る。

伐薪賣之、以給紙筆、就營田園處、以柴火寫書、坐此之故、不得早涉藝文。常乏紙、每所寫反覆有字、人尠能讀也。（薪を切って賣ったお金で紙と筆を買い、「田園」を行う場所で、柴の火を使って書物を筆寫した。こういうわけで若いうちに學問に親しむことが出来なかった。いつも紙に不足していたので、常に一度寫した所にまた字を重ね、他人が判讀するのは不可能なほどであった。）

〔『抱朴子』卷五〇、自敘〕

葛洪が著した『抱朴子』の卷末を占める「自敘」は、自らのつたなき、缺陷の多さを連ね、この部分では、自らの少年時代の苦學の様子を描いている。「田園」の語は畑仕事といった意味でここでは用いられ、「田園を營む處」は、本來學ぶための場所ではなかったのに、貧しさゆえにそこ

で學ばざるをえなかつたという場所なのである。この例が「田園」のイメージを語ると同時に、「田園」と文人との距離をも語っているのではないだろうか。しかし、距離があると言つても、「田園」の語を散文の中では目にすることが出来、「文選」や他の韻文の中では見えないというのは、「田園」という語が詩文においては避けられていたと考へるのが妥當であらう。

田中謙二氏<sup>④</sup>は、「惱」の文字が六朝以前から存在するにもかかわらず『文選』に現れないのは、六朝期に佛教用語としての特定の概念が附與されることによつて、六朝士人たちが彼らの文學にその語を用いることを忌避したからだろうと論じられている。「田園」の語についても、農業という概念が六朝士人たちにとっては文學の範疇にはなく、それゆゑに、この語が詩文の中で用いられることもなかつたのではないだろうか。しかし、農耕について觸れる詩文が淵明以前に存在しなかつたというわけではない。淵明に先がけて農業を詩文に詠つたとされる束皙が「嘗爲勸農及甃諸賦、文頗鄙俗、時人薄之。」(嘗て勸農及び甃諸賦を爲るも、

文は頗る鄙俗にして、時人之を薄しむ)(『晉書』卷五一)と低く評されるのも、農業がその主題であつたことと無縁ではないだろう。「田園」に限らず、「歸去來兮辭」の序文に見える「耕植」の語、淵明の詩文の中に見られる「園田」や「田舎」の語もまた、淵明詩を除いては、『文選』の中では見られない語であつたが、『文選』の中で見ることでできる農耕を示す語彙もある。例えば、「歸去來兮辭」本文の中に見え、農耕を示す「農人」「耘耔」の語は、『文選』の中で楊雄「長楊賦」、張衡「思立賦」、何晏「景福殿賦」において淵明以前に既に用いられている。だが、これらはもとは『詩經』(小雅、甫田)に見える語である。六朝士人らにとつて、これらの語から連想するのが農業よりも『詩經』であつたからこそ、詩語として用いられたのだとは言えないだろうか。

灌畦鬻蔬 爲供魚菽之祭 (畦に灌ぎ蔬を鬻い、魚菽の祭に供することを爲す)

(顏延之「陶徵士詠序」、『文選』卷五七)

豈直爲田家語耶、古今隱逸詩人之宗也 (豈に直だ田家

の語と爲さんや、古今隱逸詩人の宗なり)

(鍾嶸『詩品』中品、宋徽士陶潛詩)

不以躬耕爲恥 不以無財爲病 (躬耕を以て恥と爲さず、  
財無きを以て病と爲さず) (昭明太子蕭統「陶淵明集」序)

いずれも六朝期に淵明について述べているものだが、淵明の農耕生活について觸れても「田園」の語は用いられていない。顏延之が用いる「灌畦鬻蔬」という表現は、潘岳の「閑居賦」(『文選』卷十六)序文の「灌園鬻蔬 以供朝夕之膳(園を灌ぎ蔬を鬻い、以て朝夕の膳に供す)」に基づき、「灌園」の語も潘岳による表現ではなく、李善が注に引く『列女傳』に既に見られる語である。次に、淵明の詩文は單なる「田家之語」ではないと鍾嶸は語るが、その評に見える「田家」の語もまた、『漢書』卷六六や『文選』卷四一に收められる楊惲「報孫會宗書」の「田家作苦」として既に用いられ、『文選』の中でも幾度か見られる語である。昭明太子が淵明を「不以躬耕爲恥」として評價するのは、六朝士人らが農耕に携わることと少なからず「恥」とする風潮があつてこそ成り立つ句であり、「躬耕」の語は『禮

田園と時間(渡邊)

記』月令に「躬耕帝籍」として見えている。以上のことから、六朝期においては農耕を表現する際に典故を踏まえた語彙を用いる傾向が強く、淵明について述べる場合においても「田園」の語が用いられてはいなかったことが分かるだろう。淵明はこの時期、鍾嶸が「古今隱逸詩人之宗」と稱えるように「隱逸詩人」ではあつても、未だ「田園詩人」としては捉えられてはいなかったということも示されているのではないだろうか。本題からは外れることになるが、「歸去來兮辭」以降の「田園」の語についても少し述べておこう。

「田園」及び「園田」「田舎」の語が『文選』また『藝文類聚』においても見えないということは、淵明以降の六朝士人の多くが「田園」の語を採用しなかったということも示している。だが、「田園」の語が全く見られぬわけではなく、『初學記』卷三の北齊・蕭愨「和司徒鎧曹陽辟強秋晚詩」の中に「山藪良多思 田園聊復歸(山藪良に多く思ひ、田園聊か復た歸らん)」と「田園」の語例を見ることができ、「田園」と「歸」が組み合わせられて用いられている

ことは注目すべきである。初唐以降、「田園」の語が詩文のなかに次第に見られるようになり、その多くが「歸去來兮辭」を思わせる「田園」と「歸」を組み合わせる形で「田園」の語を用いているが、淵明の影響を色濃く受けていると言われる盛唐の詩人・王維に至っては、淵明の「桃花源記」を題材とする樂府「桃源行」においても「田園」の語を見ることができるのである。

復行數十歩、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然。有良田、美池、桑竹之屬。阡陌交通、雞犬相聞。(復た行くこと數十歩、豁然として開朗なり。土地は平曠、屋舎は儼然として、良田、美池、桑竹の屬有り。阡陌交わり通じ、鶏犬相聞こゆ。)

〔桃花源記〕、『陶淵明集校箋』卷六)

居人共住武陵源 還從物外起田園 月明松下房櫳靜  
日出雲中雞犬喧 (居人共に住む 武陵の源、還た物外に從いて田園を起こす。月明らかにして松下 房櫳靜かに、日出で雲中 鶏犬喧し。)

〔王維「桃源行」〕、『王右丞集』卷一)

〔桃花源記〕においては「田園」の語は見られず、「美池」「桑竹」と並列して「美田」と記されていたが、王維

「桃源行」においては「田園」の語が單獨で用いられ、次に詠われる情景からは「田園」が空間として肯定的に捉えられていることも明らかである。このことは、「田園」が語彙としても、空間としても詩文のなかに定着してきたことを示すとともに、「田園」と淵明の關係をも示しているだろう。つまり、本来「田園」の登場しない「桃花源記」において「田園」が想起されたのは、「田園」への認識が「歸去來兮辭」から淵明の作品全體、淵明自身へと擴大したからではないだろうか。ここまで「歸去來兮辭」以前からそれ以後にいたるまでの「田園」の語について述べてきたが、「田園」の語が詩文に用いられるその過程は、陶淵明文學が受容される過程の一端を示しているのではないだろうか。

(2) 「歸田賦」について

「田園」に歸ろうと詠いだす「歸去來兮辭」にとつて、ここから發想を得たのかと思わせるような題をもつ「歸田賦」が後漢・張衡の作にあり、『文選』に收められている

が、無論ここには「田園」など出てこない。西晋の張華に同題の賦があり、これらはともに歸隱後の居を詠っている。張衡の「歸田賦」は、張衡自身の作も含む長編かつ敘事的であった従来の賦に對して、小品かつ敘情的な抒情小賦の嚆矢である點においても注目に値する。(本論において以下、「歸田賦」とだけ稱する時は、張衡「歸田賦」を指すことにする。)なお、淵明自身が「歸田賦」について述べているものはないが、淵明の「閑情賦」序において、「閑情賦」を張衡「定情賦」に基づく作品として位置づけていることから、「歸田賦」も十分に知っていたと考えるとよいだろう。

(序について、詳しくは後述する。)

淵明「歸去來辭」、千古絶唱、亦是祖「歸田賦」意。

(淵明の「歸去來辭」は永久に優れた詩歌であり、またこれは「歸田賦」の内容をはじめとしている。)

(宋・魏慶之「詩人玉屑」卷上、古人亦有所祖引「漫塘錄」)

……平子、本見漢室多事、欲去以遠禍、未必志在田園、姑有激而言耳。宜其發于胸中者、與淵明不類也。

(……平子(張衡)はもともと漢朝廷での多くの採め事を目

田園と時間(渡邊)

にして、そこを去ることで我が身に火の粉が降りかからぬようにしたのであって、「田園」に志があつたわけではなく、ただ激昂して言葉にしているだけである。彼の胸のうちから出てくるものは、淵明のものとは別物とするべきである。)

(宋・葉夢得「避暑錄話」卷八)

これらの宋代の詩話から、「歸田賦」と「歸去來兮辭」の二作の關係については古くから議論されており、兩者の關係を肯定するものばかりではないが、「歸去來兮辭」を論じるにあたり「歸田賦」は少なからず無視できぬ存在であつたことをうかがうことができる。

「歸田賦」本文は、換韻によると全體に四段に分けられ、最初の一段において、自らの「歸田」するにいたつた感懷を述べ、第二段には、春の野趣溢れる山水の情景を、第三段では釣魚や狩獵を、第四段では日が沈んだ後に琴書を樂しむ様子を具體的に描いている。美しい風景は耳目の樂しみであり、釣魚や狩獵は身體の、琴書は精神の樂しみであつて、「歸田」の場は具體性を持った樂しみが羅列され、その様子は「田園」ではなく「田遊」と言うのが相應しい

だろう。「歸田賦」のその樂しみの描寫は次のようである。

(以下、ルビ點は押韻字)

〈第三段〉

爾乃龍吟方澤、虎嘯山丘、仰飛織繳、俯釣長流、觸矢而斃、貪餌吞鉤、落雲間之逸禽、懸淵沈之魈鰮。(爾して乃ち龍がごとく方澤に吟じ、虎がごとく山丘に嘯く。仰いで織繳を飛ばし、俯して長流に釣る。矢に觸れて斃れ、餌を貪りて鉤を吞む。雲間の逸禽を落とし、淵沈の魈鰮を懸く。)

〈第四段〉

于時曜靈俄景、係以望舒、極般遊之至樂 雖日夕而忘劬。感老氏之遺誡、將迴駕乎蓬廬。彈五絃之妙指、詠周孔之圖書、揮翰墨以奮藻、陳三皇之軌模、苟縱心於物外、安知榮辱之所如。(時において曜靈は景を俄け、係ぐに望舒を以てす。般遊の至樂を極め、日は夕べなりと雖も勉るるを忘る。老氏の遺誡を感じ、將に駕を蓬廬に迴さんとす。五絃の妙指を弾き、周孔の圖書を詠む。翰墨を揮いて以て藻を奮い、三皇の軌模を陳ぶ。苟も心を物外に縦にせば、

安んぞ榮辱の如く所を知らんや。)

(張衡「歸田賦」、「文選」卷一五)

第四段の最初の四句、晝から夜への時刻の移行を告げる「于時曜靈俄景 係以望舒 極般遊之至樂 雖日夕而忘劬」は、「于時」の二字を省くと、四・四・六・六の句型となり、これは前段の最後の四句の句型の繰り返しである。と、「居」の文學——六朝山水／隱逸文學への一視座——において齋藤希史氏は指摘する。また、「馳騁田獵は人の心をして發狂せしむ」(「老子」二二章)という「老氏之遺誡」によって、前段に述べてきた釣魚・狩獵から琴書へと内容の轉換が行われており、この押韻と内容の轉換のずれは、二つの段を接續させる技法であると述べられる。だが、このずれによって接續されているものは、身體と精神のそれぞれの樂しみだけなのだろうか。この四句の存在が、一方で第三段の時刻が晝であったことを氣付かせ、間もなく夜を迎えることを告げ、そのことが晝と夜を作り出し、また一方で、このずれが晝と夜を結びつけているのである。釣魚・狩獵と琴書を、行動の選擇肢としてただ並列



させるのではなく、晝と夜に配し、その晝と夜をより緊密に結びつけることで、「歸田賦」は、ただ樂しみを羅列的に述べ盡くすのではなく、具體的な樂しみに満ち溢れた一日という世界を描き出したのである。

ここに描かれる一日は、ある特定の日を示しているわけではない。「歸田」後の觀念化された一日と言うのが相應しいだろう。齋藤氏は、前掲論文の中で、「歸田賦」が『詩經』に基づく表現によって徹底的に「春」が印象づけられていることを指摘し、また、「歸田賦」が春をうたうのもまた、それが至福のときを象徴するからであって、現實の季節が春であったか秋であったかではないのである」とも述べられている。「歸田賦」においては春も晝・夜も、現實の時間とは關わりを持たず、「歸田賦」世界の枠組みを提示しているだけなのである。その枠組みの中に、賦の特質とされる「鋪陳<sup>10</sup>」によって、作品のうちにあらゆる樂しみを敷き詰めて、一つの世界を構築するのである。「田園」へと向かう歸路、歸宅、そこでの生活と時間の経過、季節の變化をも描き出す「歸去來兮辭」とは、時間という

觀點からも「歸田賦」は異なっているといえるだろう。しかしながら、張衡が換韻に技法を施しながら、樂しみを晝と夜に配したことが、「歸去來兮辭」を考える上で大きな示唆を與えてくれるのである。

## 二 「歸去來兮辭」の構造

「歸去來兮辭」は、まず序に辭職の決意をするまでの經緯を述べ、本文には「田園」へと歸りつくまでの旅路、彼を迎える我が家の様子、そして「田園」での生活が順に描かれている。この序については後述するとして、まずは本文そのものの構造であるが、全體で四回の換韻が「微・脂（通用）↓「魂」↓「刪・寒・桓」（通用）↓「尤」↓「之」と行われ（韻目は『廣韻』の分類に據るが、通用韻の判断は周祖謨『魏晉南北朝韻部之演變』（東大圖書公司、民國八五年）に従う）、六字句を基調とし、全篇を通して隔句韻で原則的に統一されている。さて、この押韻と段落分けに關して水谷誠氏（『歸去來兮辭』の段落分けと換韻に關する一、二の指摘）『中國詩文論叢』第二集）による興味深い指摘がある。先行

する中國及び日本の注釋の段落の分け方は一致しておらず、二通りの分け方があり、その異なつた解釋を生み出した要因が換韻部分にあるのだといふのである。その問題を再考するためにも、煩瑣になるが各換韻部分を順に見ていこう。

(1) 「微・脂」→「魂」

舟遙遙以輕颺、風飄飄而吹衣。問征夫以前路、恨晨光之熹微。(舟は遙遙として以て軽く颺がり、風は飄飄として衣を吹く。征夫に問うに前路を以てし、晨光の熹微なるを恨む。)(○を「微・脂」韻とする。)

本文最初の換韻が行われるのは「恨晨光之熹微」の句末である。「晨」は、『詩經』(小雅、庭燎)において「夜如何其 夜鄉晨(夜は如何 夜は晨に郷(向)かう)」と云うように夜明けを意味し、

晨雞鳴高樹 命駕起旋歸(晨雞 高樹に鳴けば 駕を命じて起つて旋り歸らん)

(阮籍「詠懷詩十七首、其七」、『文選』卷三三)

投策命晨旅 暫與園田疎(策を投じて晨旅を命じ 暫く

園田と疎なり)

(陶淵明「始作鎮軍參軍經曲阿作」、『陶淵明集校箋』卷三)と旅立ちの時間としても詩文の中で表現されてきたが、「歸去來兮辭」は「晨光」として太陽の光にその時間帯を加えている。『楚辭』にしばしば見られる「朝にし、夕にし」という表現の中では、「朝」と「夕」が對偶として扱われ、それは明と暗という自明性によって對立概念として成立するが、對偶表現を持たない「晨光之熹微」はまさに暗と明の間に位置する光である。太陽の光を意識した「晨光」は暗と明の間に位置し、明暗の自明性によって支えられる二次的な明度であり、時間帯であると言えるだろう。(二次的な明度、時間帯という意味において、夕暮れも同じであろうが、夕暮れについては後述する。)二次的であるゆえに「晨光」はより安定した固定的な時間帯へと推移することを暗示するのである。「恨晨光之熹微」の句で、晝など固定的な印象を與える明確な時間帯ではなく、「晨」といふ、夜が明け、移りかわってゆく不安定な時間帯を設定し、また、移動のさなかにある舟上で時間が早く過ぎること

とを願うという内容を盛り込むことで、先へと続く時間の進行や時刻の變化を豫期させ、ここで音韻の轉換は行われるものの、次の句との間に斷絶を與えないのであろう。

(2) 「魂」↓「刪・寒・桓」

「魂」韻への音韻の轉換とともに句形も變わり、今までの六字句から四字句に變化するが、六字句を基調とするなかでの四字句部分は明らかに變調である。この變調から通常の調子に戻るのが「引壺觴以自酌」であり、ここで同時に換韻も行われる。

携幼入室、有酒盈罇。引壺觴以自酌、眄庭柯以怡顏。□

……園日涉以成趣、門雖設而常關。□（幼を携えて室に入れば、酒有り罇に盈つ。壺觴を引きて以て自ら酌み、庭柯を眺めて以て顔を怡ばす。……園は日に涉りて以て趣きを成し、門は設くと雖も常に關せり。）（△を「魂」韻、□を「刪・寒・桓」韻とする。）

音韻においても句型においても明確な轉換點となるべき「有酒盈罇」「引壺觴以自酌」の二句の間は、「酒」「罇」

田園と時間（渡邊）

「壺觴」「酌」といった酒に關わる語彙が並べられ、内容は轉換されるどころか、換韻が行われていない箇所よりも緊密に結ばれている。四字句の部分に歸宅直後に目にうつるものが次々と描きだされ、この「酒」に關する語彙が並べられることで、六字句にいたつても途切れることなく歸宅直後の時間が續いているような印象を與えている。が、そのあとに見える「園日涉以成趣」の句によつて、我が家に歸つてきてから月日が経過していることに読み手は氣付かされるのである。張衡「歸田賦」に見えたような音韻及び句型の轉換と内容の轉換にずれを與えることで、歸宅直後の瞬間を描く濃密な時間の流れとその後の生活の緩やかな時間の流れを切斷し、場面を轉換させることもなく、速度に緩急の變化を與えて連續させるのである。

(3) 「刪・寒・桓」↓「尤」

雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。□景翳翳以將入、撫孤松而盤桓。□（雲は無心にして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る。景は翳翳として以て將に入らんとし、孤松を撫

して盤桓す。(□を「刪・寒・桓」韻とする。)

三度目の換韻においては、「景翳翳以將入」として夕暮れを描き出している。最初の換韻部分の夜明けと同様に、太陽の漸次的な動きを表すことによつて先へ續くことを暗示する、移つらう時間帯であろう。張衡「歸田賦」における、先章で指摘した換韻のずれの技法が施されているのもまた、「于時曜靈俄景 係以望舒」として夕暮れであつた。『楚辭』の中でしばしば日が暮れる描寫が見られ、魏晉にいたつても夕刻は夜への橋渡し、つまり「移行の相」として描かれてきたことは既に言われているように、夕暮れは夜明けの時刻以上に移つらう時間帯としての印象が強い。また、この換韻部は内容面においても、太陽だけでなく、雲があらわれ、鳥は歸りゆくという移行を示しており、次句へと繋がつてゆくのである。

(4) 「尤」↓「之」

歸去來兮、請息交以絕遊。世與我而相違、復駕言兮焉求。悅親戚之情話、樂琴書以消憂。農人告余以春及、

將有事於西疇。或命中車、或棹孤舟。既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。善萬物之得時、感吾生之行休。(A)已矣乎、寓形宇內復幾時。曷不委心任去留、(B)胡爲乎遑遑欲何之。富貴非吾願、帝鄉不可期。懷良辰以孤往、或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑。(歸りなんいざ。請う交わりを息めて以て遊を絶たん。世と我と相違うに、復た駕して言に焉をか求めん。親戚の情話を悦び、琴書を樂しみて以て憂いを消さん。農人余に告ぐるに春の及べるを以てす、將に西疇に事有らんとす。或いは巾車に命じ、或いは孤舟に棹さす。既に窈窕として以て壑を尋ね、亦崎嶇として丘を経。木は欣欣として以て榮に向かい、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得たるを善みし、吾が生に行くゆく休するを感ず。(A)已んぬるかな。形を宇内に寓すること復た幾時ぞ。曷ぞ心を委ねて去留を任せざる。(B)胡爲れぞ遑遑として何くに之かんと欲す。富貴は吾が願いに非ず。帝郷は期すべからず。良辰を懷いて以て孤り行き、或いは杖を植えて耘耔す。東臯に登りて以て舒嘯し、清流に臨みて詩

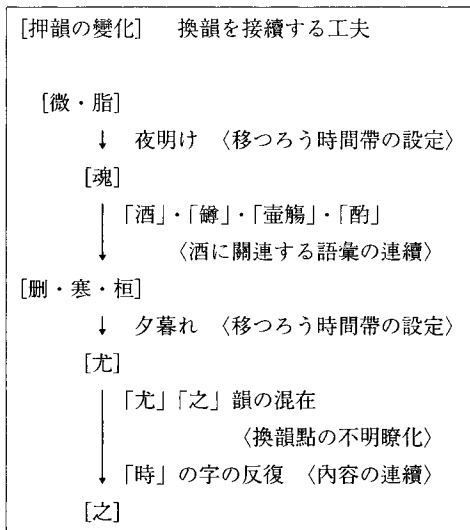
を賦せん。聊か化に乗じて以て盡くるに歸し、夫の天命を樂しみて復奚をか疑わん。(●を「尤」韻、▲を「之」韻とする。)

さて、四度目の換韻についてであるが、この換韻が水谷氏が問題とした箇所である。先行する注釋書においては、上に記した(A)(B)とする二説が存在し、それは押韻字の判断が難しいためであると水谷氏は言われている。その判断を困難にする要因は、「泉涓涓而始流」から「胡爲乎遑遑欲何之」の句にかけて、「已矣乎」を除き、交互に「尤」韻と「之」韻の文字が句末に現れることにある。つまり換韻される箇所が曖昧であるために、「已矣乎」以下を一段として(A)を區切りとするもの、「尤」韻字が句末に見えなくなるのを段落と考えて、(B)をそれとするもの二説が生じるといのである。以上が水谷氏の提議された問題である。水谷氏はこの問題に對して、淵明の辭賦及び詩の押韻狀況の調査結果によると奇數句で押韻することはなく、「胡爲乎遑遑欲何之」の句を「胡爲乎」「遑遑欲何之」の二句に分けて考えるとしても「已矣乎」の句が餘分な句となるた

田園と時間(渡邊)

めに、(B)を換韻部分とすることは困難であるとされる。また、内容面から考えても、(B)の分斷は「一連の疑問・反語句を、途中で分斷してしまうことになる」として、(A)を「換韻II段落」であると結論づけられている。

この重要な問題提示に對して、本論は水谷氏の結論とは異なる方向で考えている。この二説を生み出した要因は、水谷氏の指摘する「尤」「之」韻が交互に句末に現われて



いることだけではないだろう。つまり、「善萬物之得時感吾生之行休 已矣乎 寓形宇內復幾時」の四句の存在にも要因があるのではないだろうか。偶數句末で押韻という原則に従うならば、「已矣乎」から換韻となるべきだが、この四句の中に「時」の字が句末に二度見え、「時」すなわち時間についての言及が続き、(A)での分斷を躊躇させるのである。「時」の内容への追及は後述するが、「酒」「罇」「壺觴」「酌」と酒に關連する語彙を並べて換韻部を接續したのと同様に、この四句は音韻の上でも意味の上でも接續の役割を果たしていたのだろう。これらが要因となつて、二説を生み出してきたわけだが、換韻箇所を分析し段落を見出すことよりもむしろ、なぜ換韻箇所が判斷し難いのかを敷衍して考えるべきである。換韻箇所の判斷を難しくさせることこそが淵明の意圖であり、指摘した韻字の混在及び「時」字の反復も、換韻を一點に集中させないがための技法と言へるのではないだろうか。

「歸去來兮辭」の四つの換韻箇所を歸納してみると、段落を與えて場面を斷續的に重ねるのではなく、全體に連續

性を與え、漸次的に變容を遂げる場を描き出そうとする意圖が見えてくるだろう。張衡は「歸田賦」において、晝と夜、身體的快樂と精神的營爲を結ぶに際して、換韻に技法をほどこしたが、淵明はより意識的に、全ての換韻箇所を接續する工夫をもちたしたのである。「歸去來兮辭」はその構造の中に連續性を生み出し、その中に、家へと向かう旅路から「田園」での生活などを描き出したのである。この連續性が全篇を貫き、決して引き返すことも、切り離すことも、また繰り返すこともできない不可逆的な流れを生み出しているのである。

### 三 序 の 役 割

では、韻をふむことで連續性をもつ本文に對して、韻をふまずに「田園」に歸るまでの經緯を語る序はどのような役割を果たしているのだろうか。「歸去來兮辭」の序は、自らの歸隱にいたるまでの經緯をこう語るのである。

余が家貧しくして、耕植するも以て自ら給するに足らず。幼稚 室に盈ち、餅に儲粟無し。生々 資する所、

未だその術を見ず。親故多く余に長吏たらんを勸む。

脱然として懐い有るも、之を求むるに途なし。會たま四方の事有りて、諸侯 惠愛を以て徳と爲す。家叔余の貧苦なるを以て、遂に小邑に用いらる。時において、風波未だ靜かならずして、心 遠役を憚る。彭澤家を去ること百里。公田の利、以て酒を爲すに足る。

故に便ち之を求む。及ぶこと少日にして、眷然として歸歟の情有り。何すれば則ち、質性自然にして、矯勸得る所に非ず。飢凍 切なりと雖も、己に違えば交々病む。嘗て人事に従いしは、皆口腹自ら役せらる。是において、悵然として慷慨し、平生の志に深く愧ず。

猶お一稔、當に裳を斂めて宵に逝くを望むも、尋いで程氏の妹 武昌に喪す。情は駿奔に在り。自ら免じて職を去る。仲秋より冬に至るまで、官に在ること八十餘日なり。事に因りて、心に順う。篇に命けて、歸去來兮と曰う。乙巳の歲、十一月なり。<sup>⑩</sup>

「歸去來兮辭」本文と序を比較するならば、本文においては見られなかった固有名詞の存在がその相違点として挙げ

田園と時間（渡邊）

られるだろう。「彭澤」「程氏之妹」「武昌」「乙巳歲十一月」、加えて家は「彭澤」から「百里」であり、官職についていた期間は「仲秋至冬」の「八十餘日」であつたと述べている。一方、本文においては「田園」に歸るといふだけで、具體的な地理についての敘述などは存在しない。本文には見られない具體性が序に表れているのは、「歸去來兮辭」の屬性であるのか、或いは序文の屬性であるのだろうか。淵明の残した辭賦は、「歸去來兮辭」「感士不遇賦」「閑情賦」の三作品のみであるが、その賦の二作品「感士不遇賦」「閑情賦」に附される序は次のように語っている。

昔は董仲舒「士の不遇の賦」を作り、司馬子長がまた之を爲る。余は嘗て三餘の日、講習の暇を以て、其の文を読み、慨然として惆悵す。……此れ古人の翰を染めて慷慨し、屢伸べて已む能わざりし所以の者なり。夫の意氣を導達するは、其れ惟だ文のみか。卷を撫して躊躇し、遂に感じて之を賦す。

（「感士不遇賦序」、『陶淵明集校箋』卷五）

初め張衡「定情賦」を作り、蔡邕は「靜情賦」を作る。……文を綴るの士、奕代繼ぎて作り、並びに類に觸るに因りて、其の辭義を廣めたり。余は園閭暇多く、復た翰を染めて之を爲る。文の妙は足らずと雖も、庶わくは作者の意を謬らざらんか。

〔閑情賦序〕、「陶淵明集校箋」卷五<sup>⑬</sup>

いづれも序の冒頭と文末であるが、兩者ともに先行する作品とその作者を挙げ、古人らの賦の主題を繼承して自らも賦を作るといふのが概要であり、その内容は互いに類似したものである。先人の作に感銘を覚えて作品制作に至つたと述べるこれらの序は、歸隱にいたるまでの行動の経緯を詳細に述べる「歸去來兮辭」の序とは一線を畫していると言えるだろう。また、兩作品に見える固有名詞も「董仲舒」「士不遇賦」「司馬子長」及び「張衡」「定情賦」「蔡邕」「靜情賦」といった文人であれば誰もが知っている語で、「歸去來兮辭」序に見られるような淵明個人と關わりのある固有名詞や、制作時期などに關しては一切記されていない。本文を生み出すにいたつた契機が記されている

という點では三作品の序に共通しているけれども、固有名詞などに代表される一般性の有無は、作品の性質の根幹に係わる事柄のように思われる。つまり、「感士不遇賦」「閑情賦」の序の内容は、作品と陶淵明という個人の生に直接的な關わりを與えず、陶淵明はあくまで「感士不遇賦」

「閑情賦」の作者であり、先人の作に感銘を受けた者に過ぎない。一方、「歸去來兮辭」序の一般性を持たない内容が、作品と作者・陶淵明の生を交差させるのである。具體的な敘述が作者個人を特定し、序文に書かれる内容に現實感を與え、歸隱を詠う本文の内容を、表現の上だけのものではなく、作者の現實の營爲であるとして提示するのである。大上正美氏<sup>⑭</sup>が、淵明の序文や詩題に日付を記していることについて、この營爲によつて「客觀的事實、時間的事實に自己を相對化させ」、「自己なる存在は、表現者としての自己存在によつて確かめられる」とされるが、その方向に「歸去來兮辭」の序もあるだろう。ただ、「歸去來兮辭」の序文においては、日付のみならず個人情報を多く記すのは、「歸去來兮辭」は架空でも理想でもない、他でもない



陶淵明という作者自身の生を詠っているという現實感をもたらすためであり、隱者を詠う文學ではなく、隱者が詠う文學として「歸去來兮辭」を位置づけているのである。

『文選』においては一旦省かれた序文を、李善が抄録のたちながらも注として補ったのは、序文がもたらす現實感が「歸去來兮辭」に不可缺であると考えた所以ではないのだろうか。

さらに吟味すれば、例えば潘岳「閑居賦」(『文選』卷一六)の序文においては自らの經歷として「擧秀才爲郎」「爲河陽懷令、尙書郎廷尉平」などと官職名が明らかにされているが、「歸去來兮辭」にいたっては「用於小邑」「彭澤去家百里」のみで、具體的な官職名は記さず、その一方で「程氏之妹」「武昌」と妹を特定し、亡くなった場所を記している。官職名が記されなかったのは、序文が具體性を缺如しているのではなく、具體的な官職名を記すことを回避したのだと考えてよいだろう。ある對象に對してどのような表現を與えるかということは、その對象をどのよう認識し把握しようとするかということの表出でもある。

#### 田園と時間(渡邊)

表現される自己が、官職という絶對的ともいえる價值觀から脱し、別なる價值觀を求めようとしているその意圖を、読み手は十分に読みとらねばならない。

「歸去來兮辭」本文そのものに連續性が存在し、また、その連續性からは切り離された序の存在こそが「歸去來兮辭」に現實感を附與したとして、「歸去來兮辭」の構造について論じてきたが、この構造は作品の時間性とどのように係わってくるのだろうか。さらに本文を見ていくなかで、序の役割についてはもう一度觸れよう。

#### 四 「田園」の時間

さて、「歸去來兮辭」本文の表現のうちに二度の舟が登場し、その舟に乗って移動が行われている。一度目は「田園」へ歸る決意をして、「田園」へと向かう際に乗り、二度目の舟は、農人に春の到來を聞き、農事があるとして「西疇」に向かう際に乗る「巾車」と「孤舟」の舟である。「歸去來兮辭」の構造上、換韻にしたがって段落を設けることは忌避すべきであると思われるので、試みに、この二

度の舟の移動を指標にして、「歸去來兮辭」の時間の性質について考えていきたい。

歸りなんいざ、田園將に無れなんとす、なんぞ歸らざる。既に自ら心を以て形の役と爲す、奚ぞ惆悵として獨り悲しまんや。已往の諫めざるを悟り。來者の追うべきを知る。實に途い迷うこと其れ未だ遠からず、今の是にして昨の非なるを覺る。舟は遙遙として以て軽く颺がり、風は飄飄として衣を吹く。

「歸去來兮辭」の本文は、「田園」へと向かう舟に乗り込む前の部分において、歸隱の決意を述べている。張衡「歸田賦」においても冒頭の第一段で「遊都邑以永久、無明略以佐時。……超埃塵以遐逝、與世事乎長辭。」と歸隱の決意を述べたあと、つづく第二段からは隱遁した空間の風景描寫が始まるが、「歸去來兮辭」においては、「田園」へと向かう舟が登場するのである。この舟の存在が「田園」の境界を生み、「歸去來兮辭」の中に「田園」の内と外を作り出し、「田園」が構築された空間ではなく、官人社會とも同じ地平線上にある、現實に存在する空間である

ことを示すのである。「田園」の外側で述べるこの歸隱の決意は、序の「嘗從人事、皆口腹自役。於是悵然慷慨、深愧平生之志」と生計をたてるために本心に背いて仕官していることを嘆く箇所と内容が重複している。序が記され、續いて本文が作されたのであるならば、このような重複はまず回避されていたのではないだろうか。本文において「田園」の外側を描いたものの、より明瞭にその外側を表現するために、「田園」の外側での出來事や時間を、韻をふまないという點で形式的にも本文の外側にあたる序を附したのではないだろうか。本文と序に見える内容の重複はそれゆえに生じたのではないかと思われる。

陶詩の中で「田園」と「舟」がともに現れるものに、「始めて鎮軍參軍と作り、曲阿を經しとき作る」があるが、ここに見える舟は「田園」に向かうのではなく、逆方向の「田園」を發つ舟である。

弱齡寄事外 弱齡より事外に寄せ

委懷在琴書 懷いを委ぬるは琴と書に在り

被褐欣自得 褐を被りて欣んで自得し

屢空常晏如 屢しば空しきも常に晏如たり

時來苟冥會 時來たりて苟くも冥會せば

宛轡憇通衢 轡を宛けて通衢に憩い

投策命晨裝 策を投げて晨裝を命じて

暫與園田疏 暫く園田と疏なり

眇眇孤舟逝 眇眇として孤舟逝き

綿綿歸思紆 綿綿として歸思紆わる

我行豈不遙 我が行 豈に遙かならざらんや

登降千里餘 登降すること千里餘

日倦川塗異 日は川塗の異なるに倦み

心念山澤居 心は山澤の居を念う

望雲慚高鳥 雲を望みては高鳥に慚じ

臨水愧游魚 水に臨みては游魚に愧ず

眞想初在襟 眞想は初めより襟に在り

誰謂形迹拘 誰か謂う、形迹に拘せらるると

聊且憑化遷 聊か且く化に憑りて遷り

終反班生廬 終には班生の廬に反らん

「始作鎮軍參軍經曲阿作」〔陶淵明集校箋〕卷三

田園と時間（渡邊）

押韻は隔句末ごとに「魚・虞（通用）」韻で一韻到底である。題に「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩とあるように、この詩は淵明がまだ出仕していた頃、それも最後の職である彭澤縣令に着任するよりも以前のことと詠われていることが、この題より分かる。「眇眇孤舟逝 綿綿歸思紆」と移動する「舟」は「暫與園田疏」となり、「歸去來兮辭」の

「舟」とは全く逆方向の移動であることは先に述べた通りであるが、ここでもまた「園田」は赴任地へと続く地平線上に存在しているのである。また、「舟」に乗る直前の句、

「時來苟冥會 宛轡憇通衢 投策命晨裝 暫與園田疏」の句において、奇數句・偶數句が對句となるのが常とするところ、ここでは「宛轡憇通衢 投策命晨裝」の偶數句・奇數句が對句として、それを與えていることにも注目したい。このずれが助走となつて、「園田」からの旅立ちを印象づけるのである。茂木信之氏は「陶淵明詩の構成的原型」〔東方學報〕京都、第五二冊〕の中で、この詩を「暫與園田疏」「臨水愧游魚」「終反班生廬」のそれぞれの句を區切りとして三段に分ち、「敘事的、敘景的、抒情的」と

して「表現の質が轉位」し、「過去、現在、未來」へと「表現が時間的展開をすすめる」として構成を類型化されている。舟による移動のさなかに現在があり、そこから過去、未來へと心を寄せるのである。舟の「眇眇」「綿綿」とした移動が時間の推移を思わせるが、詩の全篇を通して時間が推移しているとは言い難い。この詩に見える時間とは、移動の最中に現在の時点を定め、過去や未來を含めた感慨を詠うという、いわばスケッチのような瞬間的な時間ではないだろうか。

一方、「歸去來兮辭」においては、舟の上での現在には「恨晨光之熹微」と早く我が家へと着かんことを願ひ、舟から降りてからの現在もまた次のように描寫される。

乃ち衡宇を瞻て、載ち欣び載ち奔る。僮僕は歡び迎え、稚子は門に候つ。三徑は荒に就き、松菊は猶お存せり。幼を攜えて室に入れば、酒有りて罇に盈てり。

「田園」へと向かう「舟」を降りた後、まさに「田園」に到着してからの時間の推移が換韻部分の連續性によつて生み出されていることは前章に述べてきた通りであるが、

表現の上でも刻一刻と推移する時間の相貌がうかがえる。目に映るものが「衡宇」「門」「三徑」「松菊」「室」「罇」と移つてゆく。視點は、次第に我が家との距離を近づくなかで移動し、その瞬間、瞬間を連ねて時間は推移していくのである。つまり、ある一點に現在が定まるのではなく、その瞬間、瞬間が現在として描かれているのである。「始作鎮軍參軍經曲阿作」は「田園」の外へ、「歸去來兮辭」は「田園」の内へと向かう、その方向性の違いがかくも時間性に差異を與えているわけではない。ここで、「歸去來兮辭」と同じく「田園」の内を描く「園田の居に歸る、五首」の首篇をさらに見てみよう。

少無適俗韻 少くして俗に適する韻無く  
性本愛丘山 性は本と丘山を愛す

誤落塵網中 誤りて塵網の中に落ち  
一去三十年 一たび去ること三十年

羈鳥戀舊林 羈鳥は舊林を戀ひ

池魚思故淵 池魚は故淵を思ふ

開荒南畝際 荒を開く 南畝の際

守拙歸園田 拙を守りて園田に歸る

方宅十餘畝 方宅 十餘畝

草屋八九間 草屋 八九間

榆柳蔭後簷 榆柳は後簷を蔭い

桃李羅堂前 桃李は堂前に羅なる

曖曖遠人村 曖曖たり遠人の村

依依墟里烟 依依たり墟里の烟

狗吠深巷中 狗は吠ゆ 深巷の中

鷄鳴桑樹巔 鷄は鳴く 桑樹の巔

戶庭無塵雜 戶庭に塵雜無く

虛室有餘閑 虛室に餘閑有り

久在樊籠裏 久しく樊籠の裏に在りしも

復得返自然 復た自然に返るを得たり

「歸園田居五首、其一」(『陶淵明集校箋』卷二)

押韻は「先・山・仙(通用)」韻で、隔句末の一韻到底である。第六句で「守拙歸園田」と述べたあと、「園田」の情景を連ねる。先に示した「歸去來兮辭」の描寫がもつ躍動感はここにはなく、靜かに目に映る情景を詠っている。

田園と時間(渡邊)

宅地、そして室内、周邊に植わった榆・柳の木と桃・李の木、遠くの村と村里の煙、犬のほえる聲と鷄の鳴く聲、何もない庭と誰もいない部屋と情景を列ねていくが、その視點の動きは、「歸去來兮辭」のような一方向にはない。これを時間の推移とするのは附會でしかなく、時間の流れから切り離された、まさにスケッチと言うべきであろう。この詩を見る限り、「田園」の内にいるから時間が推移するわけではなく、「始作鎮軍參軍經曲阿作」同様、現在という時點から過去や未來を思い描くことはあっても、その現在もまた推移していくことには意識が及んでいない、もしくは關心がないと言えるだろう。逆に言えば、「歸去來兮辭」の時間が推移していくのは、とりわけ時間の存在を意識しているからと言えるだろう。

「田園」での生活を開始してからの時間は、歸宅直後ほどの濃密な時間ではないが、緩やかながら連續性のなかで確實に推移していくことは、先に述べた「園日涉以成趣」の語が示しているだろう。舟の上での「恨晨光之熹微」という夜明けの時刻と、我が家ででの生活の中での「景翳翳以

「將入」の夕暮れの時刻の間は決して一日ではないが、これもまた全篇に通じる連続性に相俟つて、時間の推移を思わせる。その流れの中で、序に記された秋から、いつしか季節は春を迎え、二度目の舟が登場するのである。

農人、余に告ぐるに春の及べるを以てし、將に西疇に事有らんとす。或いは巾車を命じ、或いは孤舟に棹さす。既に窈窕として以て壑を尋ね、亦崎嶇として丘を經。木は欣欣として以て榮ゆるに向かい、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得たるを善みし、吾が生行くゆく休するを感ず。已んぬるかな、形を宇内に寓すること復た幾時ぞ。曷ぞ心を委ねて去留を任せざる。胡爲れぞ遑遑として何くに之かんと欲す。富貴は吾が願いに非ず。帝郷は期すべからず。良辰を懷いて以て孤り往き、或いは杖を植えて耘耔す。東臯に登りて以て舒嘯し、清流に臨みて詩を賦せん。聊か化に乗じて以て盡くるに歸し、夫の天命を樂しみて復奚をか疑わん。

この「春」は誰の目にも分かる春ではなく、「農人」に

教えられて初めて知る「春」である。そして巾車と舟に乗って移動するのだが、「將有事於西疇」と行き先も目的も抽象的にしか述べていない。そして、次の「或命巾車或棹孤舟 既窈窕以尋壑 亦崎嶇而經丘」の「舟」「壑」から思い起こされるのは、『莊子』大宗師の「夫藏舟於壑」の語である。

夫れ舟を壑に藏し、山（汕）を澤に藏して、之を固しと謂う。然れども夜半に力ある者、之を負いて走るも、昧き者は知らざるなり。……人の形の若き者は、萬化して未だ始めより極まること有らざるなり。其の樂しみ爲る、勝けて計る可けんや。故に聖人は、將に物の遯るを得ざる所に遊びて、皆存せんとす。天を善しとし、老を善しとし、始を善しとし、終を善しとす。人猶おこれに效うに、又況んや萬物の係る所にして、一化の待つ所をや。（『莊子』大宗師<sup>⑮</sup>）

二度目の舟の登場後に見える「善萬物之得時 感吾生之行休」の句は、舟の存在から萬物の變化に論が發展する『莊子』と軌を一にしているのではないだろうか。この二

度目の舟は、實際の行動として農地へと向かっただけではなく、觀念的世界への移行も意味しているのである。だが、「巾車」の存在が、この舟を完全に觀念上の莊子の舟としてしまわぬよう現實に繋ぎとめる働きを爲しているのだろう。現前の木々や泉の生命感に觸れ、萬物の化を莊子に追體驗するのである。李善が注に引く『大戴禮』「君道に當れば、則ち萬物皆其の宜を得る」は、君子が律する士の社會における言葉ではあつたが、この「田園」において萬物が得るものは「時」である。現前に存在する「萬物」が得たものは、今まで流れていた時間ではない。「歸去來兮辭」の中で、始終意識してきた時間の質がここで變容したからこそ、「得時」と言うのである。出仕生活も含めて、今まで流れていた「不可逆的な時間」は、いわば「永遠の時間」に變容したのでろう。『莊子』（大宗師）がまた「善吾生者、乃所以善吾死也」と言うように、自らの生命が死に向かうこともまた肯定するのである。「已矣乎」と嘆き、永遠の時間も内包する「宇内」すなわちこの天地の間において、おのが肉體が存在しうるのはその一時期を

田園と時間（渡邊）

占めるに過ぎないことを思い、そうであるならば心そのままに生きていこうと改めて決意する。士人として生きるも、仙人となるをも望んではない。願うのは「良辰」である。「良辰」すなわち好い時を過ごせることをひとり願ひ、「今適南畝或耘或耔（今南畝に適き、或いは耘し或いは耔す）」と『詩經』（小雅、甫田）の農事を典故として、農耕と關わりながら「田園」において生きていくことを改めて決意するのである。

「歸去來兮辭」に登場する二度の舟は、最初は「田園」の外から内へ、また出仕生活から田園生活へ、二度目は「田園」の内から更にその内奥へ、そして不可逆的な時間から永遠の時間への變容を導くのである。これらの變容を斷絶による轉換ではなく、變容として實現させるのは、本文構造が持つ連續性にほかならないだろう。「歸去來兮辭」は不可逆の時間の推移を強く意識し、遂には永遠の時間を感得するに至つたが、かくも「歸去來兮辭」に時間を意識させ、また必要とさせるものは、無論「田園」の屬性などではなく、この作品が「田園」に歸るといふ決意表明であ

るからである。もはや引き返しはしまいという不斷の決意こそが、引き返すことの出来ない時間を強く意識し、構造に連続性を與え、現在という時點が刻々と推移する様をこゝとばに紡ぎ、遂には永遠性の中に自己の生命を見出したのであろう。

む す び

詩人にとって、新たな言語表現を求めることは普遍的な行爲である。陶淵明が「田園」の語を詩文の中にもたらしめたことは、「田園詩人」と稱されるに相應しい事實ではあるが、それもまた詩人の普遍的な行爲と云えるだろう。淵明が「田園」の語を用いたこと以上に、「田園」という場を文學としていかに表現しえたかということが、この語に詩文の語彙としての地位を與えたのではないだろうか。

「歸去來兮辭」に現れた二度の舟を漕行してみたら、「田園」が表したものの輪郭がより明瞭になるだろう。永遠の時間から不可逆の時間へと舟行し、自己の生活から仕官の生活へと舟行するのである。それはまさしく人生の流れで

あり、「田園」は生命の根源と言えらるだろう。

だが、生命の根源にたどり着いたのはあくまでも結果にすぎない。「歸去來兮辭」が意圖したのは、「田園」に歸るという決意である。張衡「歸田賦」の「歸田」の場は、無論「田園」ではなく、公から離れた個人の自得の場を文學として構築したものであつた。それゆえ、時間は晝から夜へと移るものの、その時間の流れは作品内のみに流れる自己完結的な時間に過ぎなかつた。「歸田賦」の發想と形式を経て、淵明は自得の場を文學の中ではなく、現實の中に定め、その定める決意を「歸去來兮辭」として文學に表したのである。序が本文に對する「外」となり、本文にはない具體性を示すことで、「歸去來兮辭」及び「田園」に現實感もたらされ、觀念的世界に終わらせないのである。

また、作品全體に流れる時間は「歸去來兮辭」にとって絶對的なものとして描かれ、この時間は「田園」の中で不可逆性から永遠性へと變容し、その變容を音韻構造のもたらず連続性が支えているのである。序文、音韻構造、不可逆の時間と永遠の時間の併存、これらの均衡こそが「歸去來



今辭」を、既存の文學の域を超えた新たな文學として創出したのである。

註

① 陶淵明の作品を引用するにあたっては、龔斌校箋『陶淵明集校箋』（上海古籍出版社、一九九六年、中國古典文學叢書）を底本とした。

② 「孔子の典故」「樊遲請學稼。子曰、吾不如老農。請學爲圃。曰、吾不如老圃。樊遲出。子曰、小人哉、樊須也。上好禮、則民莫敢不敬。上好義、則民莫敢不服。上好信、則民莫敢不用情。夫如是、則四方之民襁負其子而至矣、焉用稼。」

（『論語』一子路篇）

「董仲舒の典故」「董仲舒、廣川人也。以治春秋、孝景時爲博士。下帷講誦、弟子傳以久次相授業、或莫見其面、蓋三年董仲舒不觀於舍園、其精如此。」（『史記』卷二二儒林傳）  
「董仲舒、廣川人也。少治春秋、孝景時爲博士、下帷講誦、弟子以久次相授業、或莫見其面、蓋三年不窺園、其精如此。進退容止、非禮不行、學士皆師尊之。」（『漢書』卷五六董仲舒傳）また、桓譚『新論』（『太平御覽』卷九七六引）においては「不窺園井菜」、王充『論衡』儒增篇においては「三年不窺園菜」と記されている。

③ 川合康三『中國の自傳文學』（創文社、一九九六年）Ⅱ章

田園と時間（渡邊）

五十頁。「……自分がいかに缺陷の多い人間であるかという敘述は、『抱朴子』の自叙の全體を貫いているのである。」

④ 田中謙二『文選』に現れない文字（同著「ことばと文學」汲古書院、一九九三年、二二二—二二七頁）

⑤ 上田武『陶淵明と東晉』（新しい漢文化教育、第一九號）、佐竹保子『西晉文學論』（汲古書院、二〇〇二年）第四章・第二節（二一七—二五頁）において、『詩經』の農事詩や帝王の籍田を詠う文學は古くからあるけれども、農業そのものが個人の文學として詠われるようになったのは、東晉、陶淵明にいたってからであることが示されている。

⑥ 「園田日夢想、安得久離析」（乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪）『陶淵明集校箋』卷三、「投策命晨旅、暫與園田疎」（始作鎮軍參軍經曲阿作）『陶淵明集校箋』卷三、また文選卷二六、「開荒南野際、守拙歸園田」（歸園田居五首、其一）『陶淵明集校箋』卷二の詩句、及び「癸卯歲始春懷古田舍二首」（『陶淵明集校箋』卷三）の詩題において、「園田」「田舍」の語を淵明は用いている。

⑦ 六朝および初唐期の陶淵明評價に關しては、釜谷武志「六朝における陶淵明評價をめぐる」（『未名』第二號）、道坂昭廣「王勃・楊炯の陶淵明像について」（『未名』第十二號）及び「盧照鄰の陶淵明像について」（三重大學『人文論叢』第十二號）に詳しく論じられている。

⑧ 『歸田賦』は、魏晉六朝短賦すべての端であり、ここから

- 發していないものはなく、「歸去來兮辭」もまた例外ではないと陶秋英は評し、また馬積高は「賦史」の中で、「歸田賦」は、①田園隱居生活を主題とした最初の作品である、②比較的成熟した短賦である、③東漢において最初の整った抒情小賦である、という三點を以て注目に値し、以後の賦に大きな影響を與えたと述べ、「歸田賦」の賦史における重要性が説かれている。原文は以下の通り。陶秋英「漢賦研究」一九八五年、浙江古籍出版社、一五四頁。（漢賦之史的研究）一九三九年中華書局重印）「……張衡還有一篇『歸田賦』、在賦史上有重要的地位。這是篇短賦、可算得是短賦初創的第一篇。魏晉六朝的一切短賦、都莫不造端于此。」馬積高「賦史」一九八七年、上海古籍出版社、一二〇頁—一二二頁。……但有三點值得注意：(1)它是我國文學史上第一篇以寫田園隱居的樂趣為主題作品（以前只片段的描寫、如『莊子』中段的某些段落）；(2)它是現存的第一篇比較成熟的駢賦；(3)它是現存東漢第一篇完整的抒情小賦。這三點對以後的發展都有深遠的影響、第一點則對以後詩文的發展有重要的影響。」
- ⑨ 齋藤希史「居」の文學——六朝山水／隱逸文學への一視座」（『中國文學報』第四二冊）
- ⑩ 肇虞「文章流別論」「賦、所以假象畫辭、敷陳其志」、劉勰「文心雕龍」卷二「詮賦」……賦者鋪也。鋪采摛文、體物寫志也。」
- ⑪ 小池一郎「暮れる」ということ——古代詩の時間意識」（『中國文學報』第二四冊）森博行「魏・晉詩における『夕日』について」（『中國文學報』第二五冊）
- ⑫ 原文は以下の通り。「余家貧、耕植不足以自給。幼稚盈室、無儲粟、生生所資、未見其術。親故多勸余為長吏、脫然有懷、求之靡途。會有四方之事。諸侯以惠愛為德。家叔以余貧苦、遂見用為小邑。於時風波未靜、心憚遠役、彭澤去家百里、公田之利、足以為酒、故便求之。及少日、眷然有歸歎之情。何則、質性自然、非矯勵所得。飢凍雖切、違已交病。嘗從人事、皆口腹自役。於是悵然慷慨、深愧平生之志。猶望一稔、當歛裳宵逝。尋程氏妹喪於武昌、情在駿奔、自免去職。仲秋至冬、在官八十餘日、因事順心、命篇曰歸去來兮。序乙巳歲十一月也。」
- ⑬ 原文は以下の通り。  
「感士不遇賦」「昔董仲舒作士不遇賦、司馬子長又為之。余嘗以三餘之日、講習之暇、讀其文、慨然惆悵。……此古人所以染翰慷慨、屢伸而不能已者也。夫導達意氣、其惟文乎。撫卷躊躇、遂感而賦之。」
- 「閑情賦」「初張衡作定情賦、蔡邕作靜情賦。……綴文之士、奕代繼作、並因觸類、廣其辭義。余園閭多暇、復染翰為之。雖文妙不足、庶不謬作者之意乎。」
- ⑭ 大上正美「日付を刻む」（林田慎之助博士古稀記念論集編集委員會「中國讀書人の政治と文學」、創文社、二〇〇二年九五頁。）

⑮ 原文は以下の通り。「夫藏舟於壑、藏山於澤、謂之固矣。然而夜半有力者負之而走、昧者不知也。……若人之形者、萬化而未始有極也。其爲樂可勝計邪。故聖人將遊於物之所不得遷而皆存。善夭善老、善始善終。人猶效之、又況萬物之所係、而一化之所得乎。」